

水棲昆蟲記

——「さんぼ」の子供「やぶ」の話——

東京女子高等師範學校教授

久 米 又 三

稔ちゃん

もう今年も「やんま」が出る頃になつたね。稔ちゃんが「さんぼ」好きで、一日中竿を持つて駆廻つて居るさ云ふ話、稔ちゃんのお父さんから聞いたよ。「さんぼ」を逃がしてやれさ云はれても、「やんま」だけはさうしても放してやらないさ云ふぢやないか。去年送つた「さんぼ」圖説の本は役に立つて居る？ 今日だね、「さんぼ」の子供を寫真に撮つたのがあるからお送りする。序でに寫眞の説明も書いて置かう。

「さんぼ」の子供を「やぶ」「さ云つて、親と異つて水の中に棲んで居るさ云ふ事知つて居る？「さんぼ」の親は蟲の中でも仲々偉い奴なんだ。蟲は大抵翅があつて、空を飛ぶこゝが出来るから、空も飛べない様な他の動物にくらべたら非常に立派な道具を持つて居る。だから蟲は此の世界で侮り難い勢力を張つて居る。其様な蟲の中でも、「さんぼ」が偉い奴ださ云ふのは、「さんぼ」は一寸休む折に物に捉る外は、他の蟲を捕つたり喰べたり、其の他なんでも飛びながらやつて了ふ。他の蟲にも翅があるが、「さんぼ」程に烈しい空中生活をする者はないだらう。恐らく鳥にもこんなのはあるまい。

そんな親「さんぼ」の子供が、物好きにも水の中に棲むさは變だけれぬ、それは本當だよ。その上此の「やぶ」は水の中に



と「ごや」の(左)型類蛭蜻

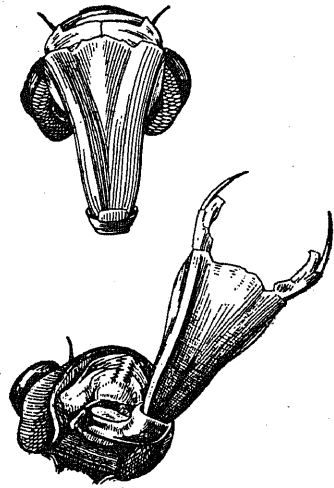
大²/₃「ごや」の(右)型類蛉蜻

棲んで、水に棲む他の蟲仲間で大分偉張つて暮して居る。弱い筈の子供が偉張つて暮せるのも、水に棲む他の蟲共が割合に弱蟲揃ひのせいでもあらう。しかし子供の時でも弱蟲仲間に入つて、偉張つて暮さうと云ふ勝氣はさうも親譲りらしい。

親「さんぼ」に色々變つた種類がある様に、「やご」にも亦色々變つたのがある。慣れた人は、「やご」を見てすぐ親の名を云ふことが出来るが、慣れないとどれも皆同じ様に見える。大體の見當を云ふと、「やんま」や「さなへさんぼ」の類(蜻蛉類)の「やご」は、腹が筒の様に圓くて長くなつて居る。

「あかね」や「しほからさんぼ」の類(蜻蛉類)では、體がもつと短くて、又腹が扁たくて幅廣い。「いごさんぼ」や「はぐろさんぼ」等(豆娘類)のは前の二つに比べると、體は親に似てもつと小さく、細くてなよ／＼して居る。又體の後に鰓と云ふ三枚の羽の様なものがついて居る。餘り細くて他と釣合が取れないので、寫真の中へは入れなかつた。寫真では判らないが、「やご」の色は綺麗ぢやない。親「さんぼ」は思ひ切つて精悍な色彩を持つて居るが、「やご」がこんなに見窄らしいのは、比較的弱い體の保護のためだらう。大抵川や池の底にある泥に似た色か、せい／＼水草に似た薄い黄綠色である。池へ行つて「やご」を捜しても見當らないのは此の色のせいでもある。それに「やご」は大抵泥の中へ潜つて居る。泥の外へ出してやる時、腹を振つて泥の中へ潜つてゆく。だから「やご」を探りたかつたら、底の泥を淺く掘ふに限る。

「やご」で感心するものが二つある。一つは獲物を捕るための口の道具と、一つは水の中で呼吸する道具とである。「や



「こや」がマスクを疊ん所
(上)と伸たしことろ(下)

蚊を退治してくれるが、「やま」は蚊の子供「ぼうふら」を退治してくれる。親子揃つて蚊の親子を征伐してくれるまは有難いことだ。も一つ「やま」で面白い事は呼吸の仕方だ云つた。親「さんぼ」を水の中へ入れたら死ぬのは、親「さんぼ」には水の中で呼吸をする道具がないからである。「やま」はその便利な道具を持つて居る。「いささんぼ」の「やま」には體の後端に鰓がある云つたが、あれが此の道具である。所がこんな種類のもは他の蟲でも持つて居るのがある。しかし「やま」でも「あかね」や「やんま」のものでは全く別な工夫がこらしてある。それは鰓が體の外に出て居るのでなくて、腸の壁に澤山の壁があつて、此の部分が鰓の働きをする。だから「やま」は肛門から水を出入させて呼吸をするし、體を急に前へ進める時などは、腸内の水を急に噴出させて、其の反動でぐつミ前へ出たりする。池か川へ行つて、「やま」を掬つて来て、金魚鉢で飼つてごらん。底に泥を入れ、水草も入れてやり、他の蟲も一緒に入れてやつたら「やま」の活動が見物出来るよ。

「こ」の顔を見るま、人が防毒マスクを掛けた様な恰好をして居る。あれは矢張りマスクミ呼んで居るが、實は顎が延びたものである。「やま」が泥に潜つて頭だけを出して居る時は、マスクを疊んで獲物が来るのを待つて居る。獲物が通りかゝるま、實に驚く程の速さでマスクを伸す。伸びたマスクの先には鋭くミがつた鉤があつて、之が獲物を突刺すのである。「やま」は「おたまじやくし」や時には小さい魚位は刺すこがあるよ。親「さんぼ」は

「さんぼ」の色々な種類が、一年の様々な時期に出て来る云ふのは、つまり子供の「やご」が親になつて飛び出す時期が種類に依つて變つて居る云ふことだ。「さなへさんぼ」の様に早く出る種類は、田舎の川べりへ行く五月にはもう澤山飛んで居る。稔ちやんの好きな「ぎんやんま」は七月頃から九月頃だらう。今迄水の中に住んで居た「やご」に、急に翅が出来て空を飛び出す所を見るのは面白いことだけれぎ、大抵の「さんぼ」は夜中に變つて了ふので一寸簡單には見られない。稔ちやんの好きな「ぎんやんま」もさうだよ。だけれぎ「さんぼ」の中でも晝間「やご」から變つて出て来るものもある。春出て来る「さなへさんぼ」等は大抵太陽が高く昇つてから、正午前後迄に「さんぼ」に變つて了ふ。寫眞は「さなへさんぼ」の「やご」から、今「さんぼ」が出掛つた所を撮つたもので、ものが小さいから大分引伸したのだ。一寸變つて面白いだらう。

「さなへさんぼ」の「やご」は、「やんま」の「やご」の半分位しかない。親が小さい様に子供も小さい、此の「やご」を水槽に入れて絲みゝ等を充分食べさせて置く。五月頃には必ず「さんぼ」になる。「さんぼ」に變ることを羽化する云ふが、羽化する前の「やご」は眼の色が變つて居る。慣れることの「やご」が明朝あたりに羽化するか判断がつく。五月の或朝、叔父さんが水漕を見て居たら、一匹の「やご」がもぐもぐ動いて草の莖を上つて来た。確に眼の色が赤味を帯びて平常とは變つて居る。やがて水からすつかり離れて、足場を固める様な格好で莖を抱いた。じつじつして居る。だんぐゝ身體が乾いて来て、乾いた泥の様になつた。未だじつじつして居る。するに突然、胸の背中の所に小さな割れ目が出来た。「やご」の呼吸が荒くなつて、その度に割れ目が縦に伸びてゆく。此の呼吸は口から腸へ空氣を入れるものらしい。身體が膨れたり、縮んだりする様子が見える。割れ目が大きくなつてゆく。割れ目の所に、全く色の異つた膨れたものが顔を出し始めた。親「さんぼ」の胸の背面だ。浅い緑色で、濕つた感じがする。もう三分たつた。縦の割れ目と直角に横の割れ目が出来ると、「さんぼ」の頭、大きな複眼が膨らみながら現れて来た。色彩はみんな淡い。「やご」から抜け出た頭と胸とは、その儘背の方へ伸



の「ごや」(半倍二約)化羽の「ほんどへなさ」
る居てけか出が「ほんど」親てけ裂が中背

つて、「やご」―「やご」云つてももう半分脱殻ではあるが―の身體へ向つて起きよるご、動きさうもなかつた肢を動かして、脱殻を抱く様にした。其の途端腹の方を上げるご、腹がすうご抜けて行つた。後へ残つた「やご」は之ですつかり脱殻になつて了つた。脱けたばかりの親「さんぼ」は、身體は軟かさうで、浅い海老茶と浅い黄緑の色合が如何にも弱々しい感じを與へる。觸つたら水でもつきさうに潤ほつた皮膚が、風に當つて傷々しい。腹が抜けてあご三分もするご、小さく疊まれて居た翅が根元から伸び始める。「ゴム」製の刀に呼吸を入れる様にだんぐ先迄伸びて行く。すつかり伸び切る迄には五分間もかつたらう。

是でやつご親「さんぼ」らしくなつた。背中が割れてから翅が伸び切る迄に二十分もかゝつた。身體の濕りが乾く毎に、

びて来る。するご同時に三對の肢が前から順々に、又同時に前後の翅が順々に現はれて「やご」の身體から抜ける様にして出て来る。はじめから頂度十分位かゝつた。肢は細くてこれで順調に育つのかしらと思はれる位だ。翅は未だ短くて「さんぼ」の背にちよびりくつついて居る。寫眞は頂度こんな所で撮つたものだ。背中から斜右に下つて少しよれよれに見えるものが抜けたばかりの翅で、翅は屏風の様細く疊まれて居る。こゝまで來たら七八分間少しも動かない。さも疲れはてゝ、一休みしなくてはもう動けないご云ふ風に。するご突然頭を振

色はずんぐ鮮かに、又濃さも増して来る。つやくした光澤が陽を浴びて輝く。なよくした翅も硬くなつて、セロファン様のバリバリ音が出さうになつた。あさ三十分も経つて、翅を開いて飛ぶことも出来る。脱けたての「さんぼ」の麗はしいこと。穢一つ無き自然の完全さよ。テニソン云ふ有名な詩人が、「二つの聲」を題する詩の中になつて居るさうだ。

此の日吾蜻蛉を見たり

彼舊きふしごをすてゝ泉を出するや

内なる生命いのち舊き殻を破り

碧石の鏡まみひて彼は出で來ぬ。

潤ひ去れば紗の如くつばさをひろげ

露しげき牧場を、野を

光りきらめきて彼は飛びゆく。

英詩なんか生れて始めて譯して見たので、人に見せては恥かしいけれど、此の詩を讀むと、偉い詩人の觀察の並々でないことに感じ入る。

テニソンが歌つた「さんぼ」がきんな種類のものか判らないが、多分夜中に羽化して早朝飛び立つ種類のものであらう。前にも言つた様に、「きんやんま」等大抵の「さんぼ」は夜中に羽化する。大體の順序は「さなへさんぼ」同じ事であるが、親「さんぼ」が「やぶ」から脱け出してしばらく休む折には、もつと仰向けにからだを反らすこと、完全に羽化するにはも少

し時間がかゝる點等がちがつて居る。「さなへさんぼ」では、羽化が始つてから兩翅が開ききるには大體一時間内で出來たが、「ぎんやんま」や「しほからさんぼ」等ではさつと四時間もかゝる様だ。

話が少し難かしくなるが、羽化したての「さんぼ」が何故濕つて居るかと言ふと、羽化が始る前に、舊い皮(「やぶ」の皮膚)の下に新しい皮(親「さんぼ」の皮膚)が新生する。此の二枚の皮の間に、脱皮腺から分泌された脱皮液が蓄つて、此の液が脱け出した親「さんぼ」の皮を潤ほして居る譯である。羽化する時「やぶ」の背中が最初に裂けるのは、もこ／＼あの部分の皮は薄く出來て居る。羽化する時に、「やぶ」が口から大きく呼吸を吸つたり、腹部を收縮さして血を前方の方に押しやつたりするに、「やぶ」の中に小さくおさまつて居る親「さんぼ」の身體が膨らんで、その結果「やぶ」の背中が割れるのである。だから羽化の途中、翅にでも傷をつけて、中の血を流しだしたりするに、羽化は順調には行はれない。

少しばかり説明するつもりで書き出したのに、大分長くなつて來た。今年の「さんぼ」狩りはどうかね。面白いのがこれらを見せて下さい。

會 告 八月號休刊

本誌八月號は休刊し、九月に於て、八、九兩月號
を合冊發刊いたします。

昭和十三年七月

日本幼稚園協會